

*** 今日の健康(6月) ***

< 流行性耳下腺炎と予防接種 >

(1) 流行性耳下腺炎の概要

流行性耳下腺炎(ムンプスまたはおたふくかぜ)はムンプスウイルスの感染による感染症です。ウイルスは唾液腺で増殖するため、唾液の飛沫によって感染しますが、発症率は60から70%で、これ以外は不顕性感染です。潜伏期間は18日前後で、発熱、頭痛、倦怠感などの症状が出た後、両側もしくは片側の耳下腺が腫脹します。38~39の発熱が3~5日間、腫脹は3~4日間続いた後次第に消退します。

おたふくかぜは唾液腺が最も頻度の高い標的部位となっていますが中枢神経系への侵襲性も高く髄膜脳炎は現在では主症状の一つと考えられています。合併症としては無菌性髄膜炎が10人に1例、脳炎が5,000~6,000人に1例、睾丸炎などが生じ、入院加療を要する場合がありますので軽視できません。重篤な合併症として難聴があります。頻度は15,000人に1例であり高くはありませんが、難治性のため後遺症を残すこともありますので注意が必要です。成人が感染しますと症状は通常重くなります。このとき合併症として睾丸炎や卵巣炎を約20%の頻度で発症します。男性の方が重症例が多くなるようです。我が国では1981年から任意接種のワクチンとして使用されています。

本物のおたふくかぜは、一度しかかかりません。ただし、おたふくかぜと同じように、耳下腺部がはれるウイルスや細菌がいくつかあり、それらに感染した時におたふくと診断されることがあります。したがって、まわりに流行がない時におたふくかぜと診断されたような場合は、違う感染症の可能性もあります。また、反復性耳下腺炎といって、何度も耳下腺がはれる病気もあります。



(2) 予防接種

おたふくかぜのウイルスに対する特異的抗ウイルス剤はなく、有効な治療法もありません。また、おたふくかぜのウイルスはヒト以外の宿主が自然界に存在しないことや不顕性感染者が多く患者の隔離が流行阻止に無効なことから、ワクチンによる予防対策が非常に有効で有意義と考えられており、1歳から接種可能です。

一般的にみられる副反応:ムンプスに対して免疫のない健康小児、成人に本剤を接種した場合、副反応はほとんど認められていませんが、2~3%に接種後2~3週間まれに発熱、耳下腺腫脹、嘔吐、咳、鼻汁等を見とめることがあります。しかし、これらの症状は軽度であり、かつ一過性で通常、数日中に消失します。

(3) 予防接種の効果

1981年以降のワクチン接種率の上昇に伴っておたふくかぜの罹患者は減少してきています。おたふくかぜに免疫のない者に注射した場合でも約90%に中和抗体が平均4~8倍で、麻しんや風しんの32~128倍に比べて低いですが、長期にわたる発病阻止が認められており、かなり低価の抗体であっても有効であると考えられています。海外でもスウェーデンでワクチン接種後の抗体保有率は91%、予防接種後の副作用は穏やかで問題とはならなかったと報告されています。